

「モノ的人間観」と情報社会論

仲田 誠

1. モノ的人間観と狭義の情報社会論

本稿の目的は情報社会論の背景にある「モノ的人間観」を批判することである。「モノ的人間観」というのは、筆者の造語であるが、簡単にいうと、人間をコンピュータ付きロボットにたとえる人間観、あるいは、「還元論的思想」に依拠する人間観のことであり、人間をモノ＝機械としてのモノや物理化学的なモノ、要素還元論的な図式で捉えられたモノに「還元して」考える思想のことである。

現時点では、心理学や神経科学など人間の本質について重要な意味を提供するはずの学問領域も全体としては「モノ的人間観」に強く規定されているが、この点は情報社会論も例外ではない。現在主流の情報社会論（筆者はこれを人間や社会を見る目が限定されているという意味で「狭義の情報社会論」と呼んでいる）はモノの論理や法則（これならコンピュータに一元的に処理が可能になる）だけで人間社会の仕組みや人間の心、認識、行動が説明できるという素朴な「モノ的人間観」に支えられているのである。そうでなければ、モノの進化、すなわち、コンピュータの発達や情報通信技術の普及、イコール、「人間社会の進化」あるいは「人間の自己実現を保証するもの」などという単純な議論が出てくるわけがないのである。

本稿では情報社会論の背後にあると思われるこのような素朴な「モノ的人間観」を、人間の認知や心の仕組みのあり方、「知」のあり方の問題を考えながら批判的に検討してみたいと思う。筆者の考えでは、狭義の情報社会論はさまざまな矛盾点や混乱をもつ思想であるが、根本的な混乱点の一つは人間の知や認識、あるいは心をモノのレベルに「還元して」とらえようとする姿勢から生じる。“生命や心をモノ＝「物理的なもの」に還元することはできない、「物理的なもの」、「生命的なもの」、「心的なもの」は相互に重なりあっても、それぞれ異なる次元の秩序に属する”というメルロ・ポンティのまっとうな指摘が、ここではほとんど視野の外におかれているのである。⁽¹⁾

現在の心理学や神経科学などは全体としてみれば「還元論的思想」に強く規定されているということをつたが、それでもここには少数派ながらこうした図式に批判的な勢力も存在する。深層心理学やマズローやロジャーズなどの人間性心理学は基本的に人間の心をモノ＝物質に還元する方法論に批判的であるし、神経科学でも、脳の機能を全体として捉える必要性を説く一派が存在する。全体としてはたしかに「還元論的思想」や「モノ的人間観」は有力だが、しかし、そうした思想だけでこの領域がかならずしも覆い尽くされているわけでもないのである。

その意味では情報社会論こそ現時点では「モノ的人間観」の最右翼とでもいえるような役割を演じている。コンピュータ神話やインターネットブームに支えられて勢いを得た狭義の情報社会論がここきて「モノ的人間観」の総本山ともいえるような役割を担うようになってきているのである。特に、人間の知恵や認知のありかたに関しては素朴な還元論、機

械論的な図式がほとんど疑うことなくこの領域では受け入れられているといっても良いであろう。情報社会論に関してはその対抗勢力は今のところはなほだ影が薄いのである。「人間の知や知覚は本質的にコンピュータのシステムと変わりがなく、コンピュータ的知能・情報処理の研究を進めることでいずれ人間の知や心はすべて説明できる」という説が事実上ほとんど何の批判もなく容認されているのが、狭義の情報社会論の現状なのである（特に日本ではその傾向が顕著だといえよう）。

「モノ的世界観」の解毒剤を得るという意味でも、情報社会論の視野をもっと広いものにするためにも、知や認識の問題を中心に人間の心のありかたについてあらためて考え直してみる必要があるわけなのだ。

以下での議論は、それだけ見れば情報社会論そのものよりも、認知心理学や神経科学に関する議論に傾斜しているといえなくもないだろう。しかし、既に述べたように、筆者の考えでは、狭義の情報社会論は、その基盤に「モノ的人間観」至上主義、無反省な「還元論的思想」を抱えているという点で大きな問題をもつものなのである。したがって、狭義の情報社会論の「根」は、還元論的心理学や神経科学の中に根ざしていると考えられるのである。その意味で以下の議論は狭義の情報社会論の「根」のありかを見届けるという意義を有する。

以下で見ると、一見、「還元論的思想」や「モノ的人間観」に強く規定されているように見える心理学や神経科学などの領域にもよく見れば、反還元論、反モノ的人間論の手掛かりが豊富に存在するのである。情報社会論の視野の狭さが認知心理学や神経科学の諸研究を確認することで一層目につくようになるはずである。

2. 人間の知とモノの論理

2-1. 人間の「情報行動」と多様な意味

モノ的世界観に呪縛された心理学と狭義の情報社会論が結びつくと、人間の知恵や心、あるいは「情報行動」をコンピュータの構造や機能にたとえたり、人間の知覚や認知を脳や神経の働きや機能に直結してとらえる傾向が強まるが、こうした傾向に対抗するためには人間の心や情報行動に含まれる「多様な意味」の回復を目指すことがなによりも必要になる。

「モノ的人間観・世界観」に立脚すると、人間の心や認識も含めてこの世界は還元論的な方法論で説明できるという考え方が強まる。つまり、より単純な要素の加算的關係でこの世界の構造は説明できるということになるのであり、世界の意味を一義的にとらえる決定論的な考えが支配的になる。物理化学や数学のモデルによって人間も含めてこの世界が説明でき、インプットとアウトプットの関係が一義的に、因果論的に決定されているという考え方がここから生まれるのである。

これは、まさにフッサールのいう悪しき「自然主義」至上主義にほかならないが⁽³⁾、たしかに物理学を盟主とする自然科学が世界観の中心に位置するようになって以来、人間についても、自然科学的な視線、その中でも特に要素還元論的な自然科学の視線が強く人間を見る目を規定するようになってきたわけである。そしてこのような「自然主義」至上主義はそのまま同時に人間や世界を見る目の「制約」にもつながるものなのである。科学の進

歩を促進した近代科学の「客観性」の立場は同時に人間や世界を見る目の「制約」にもつながったという現象学の主張をここであらためて思いだす必要があろう⁽⁴⁾。

このような意味では、狭義の情報社会論とはフッサールの批判した「自然主義」の素朴な延長線上にあるといってもけっして過言ではないのである。

2-2. 多様な意味の回復（感情と認知）

本稿の目的の半分は人間の心や知恵のありかたという視点から「モノ的人間観・世界観」至上主義を批判することだが（残りの半分は「モノ的世界観」の申し子とでもいべき情報社会を批判すること）、そのためには既に述べたように人間の心や情報行動に含まれる「多様な意味」（モノに還元できない）の回復を目指すことが必要になる。筆者はそのための試みをいくつかの場所で既に行っているが、たとえば、感情の問題を認知の問題とつなげるといふ試みを通じて「モノ的人間観・世界観」の綻びは部分的には見えてくるように思える。

モノとしての機械・コンピュータに感情がないということは常識的に考えれば自明のことであるが、一方、人間を含めた生物にとっては、感情は認知と深く結びついて切り離すことができないのである。

感情、情動の働きと深く関連すると考えられている大脳の側頭葉（特に扁桃核）を削除すると、動物は対象が見えていてもそこに意味認知が伴わないという状況になる。モノとしての対象は見えているのに、対象の生物学的価値評価や意味認知は失われ、対象に何の意味も感じられないという事態になる。これは神経科学や精神医学では、「精神盲」や「クリューバー・ビュシー症候群」と呼ばれる症状だが、こういった状態のサルは天敵である生きた蛇を平気で噛むようになるし、人間でも手⁽⁵⁾に取ったものはなんでも手当たりしだいに口に入れるという異常な行動をとるようになる。

感情や主観の問題が認識と深く結びついて切り離せないのであるならば、人間の脳をコンピュータにたとえるアナロジーはその時点で躓くことになろうが、これはたんに人間＝コンピュータ説の足元を揺るがすだけでなく、狭義の情報社会論の土台も同時に揺るがす問題にもつながると考えられるのである。コンピュータを駆使するデータベースにとっては、感情や個人の主観を分類の基準にしたシステムの構築は原理的には考えにくい⁽⁶⁾が、逆に人間にしてみれば、感情や主観を抜きにした情報処理のシステムはまったく不十分なものでしかないのである。

感情の問題は、狭義の情報社会論の中では不当に軽視されている問題ではあるが、この点についてわれわれはあらためて注目する必要がある。認知と感情の関わりについて深く掘り下げて検討するためには、時間をかけた取り組みが必要と考えられるが、以下では、この問題に重要な示唆を与えてくれると思われる議論をいくつか取り上げてその要点を紹介してみたい。

Jackson（彼の議論は神経心理学や失認症研究⁽⁷⁾の領域で古典としての評価を受けている）は言語を知的言語と情動言語に区別する。知的言語は話し手の意図を伝達するもので、情動言語は話し手の感情を表すものである。健全者では両者は混然一体化しているのであるが、病的状態では両者は分離し、知的言語がより強くダメージを受ける。Jacksonによれば、yes と no という単純な言葉にさえ、知的言語－情動言語という二面性が認められ

る。yes と no がはっきりとした意志伝達（質問に対する否定、肯定など）の手段として発せられる場合もあるし、感情のたかまりに合わせて間投詞的に発せられる場合もある。この場合重要な点は情報言語の方がよりベーシックで安定した形態だという点である。失語症にその点が明瞭に認められ、失語症でダメージを受けやすいのは、ベーシックで安定した形態としての情動言語ではなく、知的言語＝言語の陳述的使用なのである。

中村雄二郎の紹介するところによると、ルソーも同じようなことを考えていたようである。⁽⁸⁾「はじめに人々が言葉を発したのは詩のかたちであった。人々が未知のものに出会うとき、理性に先だつて情念がはたらき、対象がイメージとしてとらえられるものであるから、概念的な言葉よりも前に比喩的な言葉が生まれる。」このようなルソーの説を踏襲して、中村は次のように問題を整理する（ここにはヤーコブソンやソシュールの議論も取り込まれている）。「一つのパラダイム（範列関係）のなかで、意味と意味、語と語とは類似や連想の関係によって互いに結びついている。パラダイムはそのような隠れた、無意識的な約束事のシステムであり、つまりは共同感情の場でもある。…他方、ルソーのいう欲求、あるいは必要の言葉は、結合軸の優勢なことばとしてとらえることができる。…結合軸が優勢になり、統合の面が強くなるにしたがつて、言葉は概念化し、論理化し、事物を外がわから明示することができるようになるが、そのことばは人間と人間を同化させるよりも相互に客体化し、対立させることになる。」⁽⁹⁾

また、神経心理学者の山鳥重は神経心理学の立場から次のように主張しているが、これは本稿の主張と基本的に重なり合う注目すべき主張であろう。「感情は認識の原初的段階、その上に表象性（有形性）の認知が生じ、最終的な判断が導かれる。」「言語とか判断など通常いわゆる認知過程として扱っているものだけでなく、このような分節的、具体的な認知過程の背後に形象未分の（分節できない）心理過程が存在する。つまり、感情である。」

「感情は分節されない経験、表象化されがたい心理経験、感情とは個体が世界を認識するときまず最初に生じる認知形式。」⁽¹⁰⁾

2-3. 情報の体制化＝全体知

モノ的人間観、要素還元論的図式では説明が難しい人間の心や認識能力として、「全体知」とでもいうべき知の働き、認識の力がある。「全体知」とは、「全体的な意味」をつかむ能力、対象の統合的な意味をつかむ能力のことであるが、このような知や認識の働きは、ばらばらの要素を加算的に組み合わせることで全体がつかめるという「要素還元論」的な世界観・人間観では説明が困難な性質のものである。

「全体知」対「部分知」という図式は今のところ全体としては仮説の範囲にとどまるものであるが、こうした図式を想定することで人間の知や認識の働きが説明しやすくなるのは確かであるように思える。先入観をもたない素直な目でみれば、この世界には「全体知」をはじめとして「要素還元論」的な図式では説明できない現象があふれているともいえる。

メルロ＝ポンティが『行動の構造』でとりあげている事例（もともとはゲシュタルト心理学者コフカの研究による）を紹介しよう。「黒い対象をえらぶように訓練された動物は、その対象が強烈な照明のもとに呈示されて、それが訓練的に用いられた光より1000倍も多くの光を反射するときでさえ、正の反応がみられるであろう。もしわれわれが物理的現象、

すなわち動物の目に実際に受容された光に固執するならば、他の条件では刺激における2%の変化でも十分に習得反応を停止させることができるだけに、この動物の行動の恒常性は(12)「いっそう理解しにくいものとなる。」

こうした行動、認知が可能になるためには、対象だけではなく、対象を包み込む全体的な場の意味の把握（照明と対象＝照明されたものの全体的な関係性がここでは大きな意味をもつ）が必要になるが、この全体的な場の意味と対象との関係は部分知的な方式では説明が難しい。メルロ＝ポンティ自身は『行動の構造』の中で生物体にとっての「刺激」の意味を次のように整理するが、結局「全体としての刺激の意味」の把握が重要であり、生物体には本来そのような能力が備わっているということをいっているわけである（全体知というのは単純な知能のことだけをいうのではなく、このような感覚レベルでの情報の体制化の能力も指すものであると考えておく必要がある）。「ある興奮の運命は、有機体的状態の全体や同時的ないし先行する興奮との関係によって決定され、そして有機体と環境とのあいだの関係は、直線的因果性(13)の関係ではなく、循環的因果性(13)の関係だ…」

「全体的な意味」の重要性は被験者の視覚に関する実験によっても確かめることができる。

人間の眼は機能の面からみて、対象を注視して詳細な情報をよみとる機能に優れている部分（中心窩）とそれ以外の周辺部とに大きく分かれるが、特別な装置を使って眼の中心部でしかものが見えなように工夫する。このように視覚を中心部の機能のみに限定した被験者（中心点の周囲直径3度の範囲が見える）に字などを見せる。全体が一度に見えないので被験者は字などの対象を「要素還元論」的な方法（つまり部分の積み重ね方式、部分を逐一たどる読みかた）で見ることになるが、興味深いことにこれだと対象の判別がむずかしくなるのである。数字やローマ字はそうでもないが、不連続な線の組み合わせで描かれたひらがなや漢字では対象の読み取りが困難になる。人の顔の似顔絵などはまったく誰の顔かわからないという事態になる(14)。この実験の担当者たちはこの実験の結果を踏まえて次のようにまとめているが、的を射た説明であろう。「…ゲシュタルト心理学が主張するように、たしかにわれわれは図形を細部まで分解してとらえるというような知覚のしかたはしていない。…われわれは図形を構成する部分的要素を取り出すような見方はせず、全体あるいはまとまりをとらえることによって、図形各部の相互関係を把握するような見方をしている(15)…」

失認症の研究を通じて、要素に還元できない「全体的な意味」の存在を確認することができる。

山鳥重が報告しているOさんという失認症患者は、要素的な視覚は保たれているのに、形あるものがわからない状態にある。つまり、文字は読める、新聞も読める、小さいものたとえばミニカーの玩具などもよくわかる。日常生活用品を写したカラー写真もよくわかる。ものの立体感もよくわかるようである。しかし、Oさんには顔がわからない。「道を歩いていても、人の顔がわからないので、同じ人に何回も頭を下げてわらわられてしまう。」

山鳥はこうした状態について次のように説明する。～形を知覚するためにはまず、大きさ、動き、傾き、色などが受容され、ついでこれらの構成要素が一つのまとまりある形として、構造化されなければならない。さらに複雑な形の知覚には線を正確に知覚して、線

の集合の全体を一つの形として同時に把握する機能が必要である⁽¹⁶⁾。

つまり、山鳥の説明を解釈すれば、部分を要素還元論的に単純に加算しても、そのまま全体の意味に到達できるわけではないということになるのである。

しかも、山鳥によると、知覚がモノとしては一つの形態に統合されても（これが困難になるのが、統合型失認と呼ばれるもの）、これがそのまま形の意味の把握につながるわけでもない。「連合型失認」（連合性視覚失認）では、モノの形態は把握されている（形態の模写は可能）のに、形態の意味を理解できないという状態になる。このような患者は、鍵の絵は正確に模写できるのに鍵の絵（自分が写した絵）を見せるとなんだかわからない。

「豚」の絵でも同様である。「犬かな、なにか動物にはちがいないけど」。つまり、「かたち」は見えるが、その「意味」がわからないという状態にあるのである。しかし、このような患者でも対象に手で触れるとなんだかわかるのである⁽¹⁷⁾。

失認症や失行（たとえば、観念失行というのは、使用するべき対象物の認知は保たれているし、運動執行能力も問題ないのに、対象の操作が困難になる症例である）の症例を通じてわかることは、人間の情報処理の複雑性にほかならない。この複雑性は「形は見えていても意味がわからない」、「意味がわかって使用できない」、「具体的な個別の対象の意味はわかって、それを抽象的な意味のレベルにつなげることができない（個別的对象の意味はわかって、机全体という意味⁽¹⁸⁾がわからなくなる＝ゴールドシュタインのいう抽象的態度、範疇的態度のレベルの障害）」というさまざまな症状となつてあらわれるが、この症状の多様性は、単純な要素の加算＝全体の意味という単純な図式を拒否する意味をもっているわけである。

現在モノ的世界観・人間観に立脚する神経科学でさかんに行われている認知研究の一例に、「モノを単純な要素に分解してこの単純な要素が脳のどの部分で処理されているか明らかにするという」研究例がある。典型的には、脳の視覚野のコラム構造がどのような特定の情報処理を担当しているかというタイプの研究である。しかし、失認症の研究などを通じてわれわれが確認できることは、そのような「単純な要素の加算」という図式では多くの「意味」が見落とされてしまうということなのである。

メルロ・ポンティが紹介している実験（トレンデンブルクの実験）は、「単純な要素の加算＝全体の意味」という図式の単純さをはっきりと否定している。～適当な大脳領域が部分的に切除されて、右脚ではえさをつかむことができなくなった動物は、その代理をしていた左脚をきってしまうと、ふたたび右脚を使うようになる。たとえこのとき、右脚を支配する中枢を切除しても、状況が緊急なしかたで強要するときには、いぜん右足を使うことができる。…神経支配はその都度「状況」そのものによって、規制されて全く新しく配分されるという仮説の方が、その現象の様相にははるかによく合致する⁽¹⁹⁾。～さて要素還元論者はこの難問にどう答えるであろうか。

2-4. 精神医学と全体知

上の事例だけからも「要素を単純に加算する方式の知的作用、情報処理過程＝部分知の限界」、「単なる部分の寄せ集めでは説明できない“全体的な意味”をつかむ能力が人間には（生物にも）ある」という図式が引き出されるのであるが、この点を精神医学の領域の研究事例を紹介しながらさらに掘り下げて検討してみたい（精神医学も全体としては要素還

元論的な思考が強まりつつあるが、それでも全体知に関する貴重なヒントはあちこちに埋もれている)。

精神医学の領域で全体知について考える上でたいへん重要な議論を呈示しているのが木村敏⁽²⁰⁾である。

木村敏によると、人間の認識の働きには個別感覚的な認識の働きと、「共通感覚」的な認識の働きの二種類がある。木村は、前者の認識の働きを「クリティカ」、後者を「トピカ」と呼ぶが(イタリアの哲学者ヴィーコのことばを借りている)、「クリティカは所与の個別的对象に対して分別理性をはたかせ、その真理性について判断を下す技術」であり、トピカは、「多くの所与を総合的に概観してそれらのあいだにはたらいっている意味関連を発見し、問題の所在がどこにあるかを見抜く技術」である。この二種類の認識の働きは、同時に「リアリティ」と「アクチュアリティ」という二種類の現実のありかたと関連するのであるが、「リアリティ」は個別感覚によって認知し、主としてクリティカによって判断しているような現実であり、一方、「アクチュアリティ」は、共通感覚＝全体的認知によって「身をもって」経験し、トピカをはたらかせてその生命的・実践的な意味をつかんでいるような現実のことである⁽²¹⁾。

木村敏は精神医学があつかう「心の病」はすべて共通感覚の病、構想力の病理だと言い切るのだが、この「共通感覚」、「構想力」とは、筆者の理解によれば、生きたものとしての全体的現実をつかむ力、すなわち、「全体知」と大きく重なるものである。だとすれば、「全体知」には現実をモノ＝リアリティとしてではなく、意味＝アクチュアリティとしてつかむ力も含まれることになるのだが、この点はとりあえず保留して「全体知」＝「全体的現実をつかむ力」と議論を限定して考察を進めれば、木村と一致する主張は他の研究者からもきかれるのである。

心の病的状態(特に分裂病)の一つの顕著な特徴に「全体知」の欠如(全体知ということば自体は使用されていないが)という状況があることは、精神医学(神経科学でも)の研究領域の中で繰り返し指摘されている点である。この点に関係する研究例を検討してみよう。

1) 分裂病は全体知の障害か

木村敏は精神病(特に分裂病における)における妄想はトピカの異常＝個別感覚の背後ではたらいっていてそれらを総合している共通感覚の働きの故障である⁽²³⁾と考えるが、中安信夫の主張もこれと基本的に重なる。中安信夫は、「“状況意味失認”こそ分裂病の一次障害でかつ唯一の障害である」という自説を展開する(ヤスパースの妄想に関する説などがてがかりになっている)。この中安のいう「状況意味失認」とは木村敏のいうトピカ、あるいはわれわれの「全体知」ということばに近い概念である。

中安によれば、意味の認知の主要なものとして、「則物意味の認知」(「その対象は何であるか」という認知＝道路に財布が落ちていた場合「これは財布だ」と考える認知)と「状況意味の認知」(「その対象はその状況の中でなにを意味するか」＝「この財布は誰かがうっかりと落としたのだろうか」という意味づけを伴った認知)とがある。状況意味の認知とは、状況全体の統合的理解をもって初めてなされる認知、統合化機制の強い認知(統合的認知)である。状況意味とはヤスパースの「知覚に付随する意味意識」、サルトルが「他の対象物との無数の時間的空間的決定関係“意味関連性、あるいはいわゆる道具関連性”」

と呼んだものに近いが、中安は分裂病の妄想知覚とは「則物意味の認知は正しいが、状況意味の認知は誤ったもの」と考えるのである。⁽²⁴⁾

2) 分裂病の認知障害は現実認知の狭さであるという説

斉藤治、丹羽真一らは、「分裂病の認知・行動障害は情報処理システムのうち主として認知文脈に依存した過程＝認知・行動モデルの組織制御系の障害」ではないかという仮説を呈示する。斉藤らによれば、分裂病の認知障害は、現実認知の狭さ、「レコードは傷つきやすく、(ジャケットに付属の)袋でも傷になる」といっておきながら、裸のレコードを何枚も平気で積み重ねておく患者(33歳の男性)の例などに見るように、自己を社会的諸関係の中で客観的に把握するための自己対象化能力に問題があるのだが、これは、認知・行動の中枢機構モデルを、「刺激処理系」と「反応処理系」と「組織制御系」の3つの系にわけて考える斉藤たちのモデルでは、「組織制御系」のレベルの障害と考えられる。「刺激処理系」はWhat is it?の情報を処理する系(刺激情報の特徴抽出、記憶との比較・照合、意味判断)、「反応処理系」はWhat's to be done?という行動のレベルの系(反応選択肢〈記憶〉からの選択・吟味、出力組織の諸過程)、「組織制御系」は、「主体が置かれている状況〈環境〉に対して適切な認知・行動を組織し、維持するための能動的な全体把握機能」のことである。つまり、「組織制御系」は、「刺激・反応処理過程を組織し監視しつつ、かつこれら両過程からのフィードバックにより自らを改変、更新する」機能をもつのである。⁽²⁵⁾

3) 知覚と情報の体制化

分裂病患者がトピカ的な知＝全体的・統合的な情報処理能力の点で問題があるということは、知覚の問題に関しても明らかになっている。

Placeらは分裂病患者グループと非分裂病患者グループの両グループにタキストスコープで呈示された線の数を判断させる実験を行っている。この実験によると、分裂病患者グループではノイズ条件(線に円を交える)で成績が低下する。ここから示唆されるのは(分裂病患者グループでは)「知覚における全体的な体制化過程に障害のあること」(御領)だが、この点は、線がグループ化されて呈示(類似性や近接性〈proximity〉の法則にそうかたちで線が呈示される)されるという条件での実験でさらに確認される。非分裂病患者グループの成績は形が複雑になる(カオス化する＝heterogeneousでnon-adjacent〈非隣接性〉)と低下するが、しかし、分裂病グループでは組織化(線の)の要因によっては成績は左右されない。つまり、分裂病患者の場合、情報の体制化の過程が関与していないということが考えられるのである。⁽²⁶⁾

松井三枝らの実験でも同じような「情報の体制化」の障害が報告されている。

分裂病患者に一組の絵(たとえば、ベントン〈Benton〉視覚記憶図版)を見せて視覚情報処理の過程を調べてみると、分裂病患者の場合は特異な傾向が認められる。つまり、患者は対象のごく一部しか見ないのである。健常者は、通常与えられた絵の全体をまんべんなく眺めわたすのに対して、患者の視点は絵のごく一部のみを繰り返したるだけである。分裂病患者の視点には、「注視点数が少なく、平均停留時間が長い、平均移動距離および総移動距離が短い」という傾向が現れている。松井らによると、このような結果は、「分裂病患者では、刺激を意味のまとまりとして組織化することが困難」なために現れると考えられるのである。⁽²⁷⁾

4) 描画に見る情報の体制化・統合化

須賀良一は慢性分裂病患者と非分裂病者に統合型 HTP テストを実施し（家・木・人の3課題がことばで与えられ、被験者はそのことばからイメージを浮かび上がらせ、それを絵に描く）、描画形式を多項目にわたって評価し、それをさらに数量化3類で分析しているが、この分析の結果、分裂病患者の絵の「まとまりのなさ」という点が明らかになっている。非分裂病患者の絵が家や人の表現に歪みが少なく、構成要素の相互関係が考慮されたまとまりのあるものが多いのに対して、分裂病患者では、家や人といった構成要素の個々の表現に歪みがあり、相互の位置関係や大小関係、時季等が考慮されておらず、平面的・羅列的なものが多い。これは、分裂病のいわゆる陰性症状、特に会話の貧困、注意の障害との関連で注目されるが、須賀によれば、この描画の特徴の背後には分裂病患者の統合力の障害がある。須賀によると、分裂病者の多くは「まとまりのない行動・思考」と表現されるような症状をもっている。つまり、複数のものごとを相互に連合させ、余分なものを排除し、一つのまとまりのある全体とする能力の障害がここに認められるのである。分裂病者に最も多く見られる絵は不完全で歪みのある家・木・人をただたんに羅列的に並べたもので、遠近感をかき、全体としては一枚の絵としてまとまりのないものとなっているが、これは分裂病者の「統合力」の能力の欠陥を示唆するのである。⁽²⁸⁾

2-5. 還元論的意味

上で見たような分裂病患者の情報の統合化・体制化という面での障害は前頭葉損傷患者との類似性という点でも注目されるが、われわれが特に注目したい点は情報の統合化・体制化が還元論的なあるいはいわゆるボトムアップ的な図式では説明が難しい点である。⁽²⁹⁾

人間の視覚情報処理過程において注目される現象の一つに、「部分的な情報から全体を復元するという充填過程や補完などの過程」の存在があるが、こうした柔軟な情報処理が可能になるためには、脳ないし眼にあらかじめ「全体的意味」が見えている必要がある。カニツアの主観的三角形（モノとしては存在しない主観的三角形が見える一種の錯視）などもこのような充填過程や補完などの過程の一現象として説明されたりするが、常識的に考えてこのような見え方が可能になるためには、脳にあらかじめ全体が意味として見えている必要がある。統合化された情報があれば、部分の復元は可能になるが、その逆は不可能だと考えるべきであろう。還元論者が暗黙のうちに前提としているような、「充填過程や補完作用があるから、脳には全体が見える」という説明には論理の飛躍がある。むしろ、考えるべき方向はその逆であって、脳には全体が見えるから部分の充填過程や補完作用が可能になるのである。こうした事例に示されるように、要素還元論は見え方の全体性を説明するという点では、大きな困難を抱えている場合が多いのである。

脳や人間の目にはなぜ全体が見えるのかはゲシュタルト心理学以来の難問だが、とりあえず、要素還元論やモノの世界観では十分に説明できない「意味」がこの世界にはあるのだと考えておくしかないだろう。われわれが上で確認した分裂病のさまざまな症状は、人間の認知や思考にはなんらかの「全対知」的メカニズムが組み込まれており、この機構が損なわれるとさまざまな病理的状态が現れるということの意味していたのであるが、このような「全体知」については、還元論的図式やモノ的人間観がさまたげとなって十分に議論がすすめられてこなかったという事情がある。しかし、中には木村敏のように

還元論的図式にとらわれない研究者が存在するのである。この後われわれはこのような全体知的な目をもった研究者や思想家たちの議論を参考にしながら「全体知」など、「要素還元論」や「モノ的人間観」では説明できない人間の知や認識の多様性についてさらに考察を深めていく必要があるだろう。

須賀哲夫という心理学者は、「主観を客観に還元することはできない」という興味深い発言をする。ユークリッドと非ユークリッドの諸幾何学がそれぞれに真であるのと同じ意味で主観と客観の関係を考えるべきだというのである。そう考える根拠は知覚の独特な働き（⁽³²⁾ 先天的とでもいうべき「因果性の知覚」や反転現象のメカニズムなどに代表される）に求められるが、部分と全体の関係についても同じことがいえるかもしれない。メロディは個々の要素（音）の単なる集合に還元できない。モノの形の単純な要素を加算しても形の全体の意味はつかめない（上の失認症の議論を参照）。だとすれば、要素還元論的な知＝部分知をもってしては、「全体の意味」は把握不可能だということになる。

2-6. 還元論の中の全体的意味

「全体は部分の単なる合計以上の意味を持つ」というのはゲシュタルト心理学の根本的原理だし、上でも繰り返し確認してきた点だが、還元論的、ボトムアップ的な方法論にのみする研究者たちも秘かに自己の理論や図式の中に非還元論的な意味を忍び込ませていることも多い。上でも既にこの点についてはふれたが、たとえば、著名なマーのモデルの中にもこの逆説が潜んでいるようにも思える。⁽³³⁾

マーのいわゆる2 1/2次元スケッチというならば、観察者から見た対象の再現されたかたちであり、これについてはたしかに要素の集合によって分析や再構成が可能かもしれない。だが、三次元モデルになると事情が違⁽³⁴⁾うように思える。これは、「物体の空間構造を物体自体を中心とした座標系で表わ⁽³⁴⁾すものであって、観察者からは対象それ自体＝モノとしては、観察されることのないいわば「理念型」なのである。現象学のことばを使えば、「本質 Wesen」または「形相 Eidos」なのである。

マーの図式の中には秘かに「全体的意味」、「本質」といった非還元論意味が持ち込まれるように思えるのだが、この点に関する次のような発言はマーのモデルだけでなく、いわば還元論的、ボトムアップ的図式全体に向けられた批判でもあろう。～トップ・ダウン型の情報なしで、実際にどの程度まで（マーのモデルのような）視覚的処理が可能かについては疑問の余地がある。⁽³⁵⁾～マーの強調するようなボトムアップ的過程は、いつも対象全体についての…予見⁽³⁶⁾によって導かれてもいなければならないということ、われわれは忘れてはならないのである。

マーのモデルだけでなく、最近の神経科学の主流の研究（脳のコラム構造の研究に代表されるように、人間や動物の情報処理の局所論的構造を明らかにすることによって人間や動物の知覚、認知の仕組みを解明しようとする研究＝本質的に還元論的な手法に基づく研究）全般についても、「本質」や「全体的意味」抜きで知覚や認識が成立しうるのかという疑問が常につきまとう。これは現象学でいう「射映」Abshattungに関わる問題でもあるが、モノに関するわれわれの知覚や認識はつねに未完成、不完全なのである。動物の知覚の実験に使うような単純な静止した図形は別として、現実の環境の中では物体は多くの場合、たえず変化し続けるなにものかである。見る側の体や視線の動きで見え方は常に変

化するはずだし、対象の側でも生物などはそれ自体が常に動いているし、石ころなどでも光の加減などによって見え方は固定していない。モノ＝対象はけっして一度にその全体像を見せることはない。立体などをとりあげてみればわかるように、われわれの目の前に見える対象は側面や背面などがわれわれの視野からは閉ざされている。いうならば、われわれは見えていない部分も含めて対象を見ているのである。モノの見え方が常に未完成であるのは、時間の問題とも関係する。ヴァイツゼッカーは次のように言う。～現在という時間が過去や未来となら関係をもたないなら人間は世界のできごとについて知覚を通じては何一つ知ることができないといってよい。現在が過去や未来と関係をもっているからこそ、対象は時間を通じて変化を続けながらも同一のものでなくてはならない。…対象がそれらが自分にとって種々に異なった現出の仕方⁽³⁷⁾で体験されながらも、つねに同一のものである場合にのみ、知覚することができる。

われわれの知覚や認識がつねに未完成、不完全であるならば、要素を積み重ねても永遠にモノの全体的知覚・認識は不可能になる。要素還元論者（「全体」や「本質」について知っていて知らないふりをしている人たちも、あるいはそうした問題に鈍感な人たちも）は実際のところ大変な難問に直面しているわけである。

3. 今後の課題

以上、「モノ的人間観・世界観」に還元できない、要素還元論的図式では説明の困難な多様な意味のありかたについて考えてきたが、筆者の持論ではこのような議論は「狭義の情報社会論＝現在主流のテクノロジー主導型の情報社会論」への批判に強く結びつく可能性をもったものでもある。筆者の考えでは「狭義の情報社会論」とはまさに「モノ的人間観・世界観」の申し子にほかならないからである。人間の知や認知、心に関する議論の中から「多様な意味」が排除されていること、このことが人間を見る眼をどれほど「限定的」なものにするか、本稿ではその点を検討してきたわけであるが（問題のありかを指摘しただけで終わってしまっていることも多い。不十分な点についての議論の掘り下げは今後の課題である）、「狭義の情報社会論」も同様に、本質的には、感情、全体知、主観性、人格、アクチュアリティといった「多様な意味」（人格、アクチュアリティについてはここでは取り上げることはできなかったが）を排除ないし軽視するところになりつつある図式であろう。情報社会におけるコンピュータ神話、ハード・テクノロジー優先の思考の図式からは、当然のことながら、感情や個人差、主観性、さらには全体知といったものがこぼれ落ちるのである。これは、逆にいえば、情報社会が目標とする客観性、効率、情報処理の速度、デジタル化は、主観性、個性といった「多様な意味」を犠牲にして成り立つもののだともいえる。あるいは本来両者は両立しうるものなのかもしれないが、少なくとも、現状のハード優先の思想のもとでは、主観性や個性、感情といった要素、コンピュータにとってはノイズでしかない要素が軽視されているのはたしかであろう。しかし、本当は人間の認知も思考も、あるいは社会の「進歩」も、このような「ノイズ」を抜きにしては成り立たないものなのかもしれない～筆者はそう考えるのである。

実際、全体知や人間的な感情を排除したところに生まれるデジタル的思考＝還元論的思考は、その視野の狭さの故に現実社会においても、既にさまざまな問題を引き起こしてい

るようにも思える。

先日（1998年9月26日）の朝日新聞は、米国の著名な投資会社、ロングターム・キャピタル・マネジメント（LTCM）の「事実上の破綻」を報じている。この投資会社にはノーベル経済学賞受賞の二人の高名な経済学者が経営参加していたそうなのだが、「花見酒の経済」の足元の危うさはノーベル賞級の知恵をもってしても、見抜けなかったらしい。アジアから始まった金融不安はいよいよ「花見酒の経済」の本家アメリカまで巻きこんで世界中の経済がお先真っ暗という感じになっているのだが、この事態はいったいどうしたことだろう。コンピュータや情報通信技術をフルに駆使する合理的な情報システムの体系～それが現代の高度な市場ではなかったか。

同じような問題＝現代の神話の崩壊のきざしは、もう一つの現代の神話（アメリカ産の）「情報社会」に関しても現れつつある。『毎日新聞』は、98年9月11日の夕刊で「警察白書；ハイテク犯罪に警鐘」という見出しで98年の警察白書をもとに日本におけるコンピュータネットワーク事件などのハイテク犯罪の増加を報告している。その一日前の『朝日新聞』では、「知らない間に他人のパソコンに入り込み、メールを盗み読みしたり、ビデオカメラを接続したパソコンの場合は、映像を盗み取りしたりする新型ウイルス」の登場を報じている。インターネットを通じて世界中にばらまかれる児童ポルノ（の取締り）の問題も最近しばしば新聞紙上で目にかかる。

こうした現象を通じて教えられるのは、狭い視野＝部分知をもってしては現実社会の複雑さと多面性（そこに含まれる多様な意味）を読み解くことなど最初からできない相談だということだろう。あるいは全体知や人間的な感情をないがしろにしたシステムがもつおぞましさについての警告であろう。

経済学者の佐伯啓思は、市場は本当は、文化、芸術、美意識、モラル、伝統、慣習、常識、知識（情報に還元できない）といったもの＝非市場的要因によって背後から支えられているのだという。たとえば、「正常な価格」というものも、一種の常識、社会的カテゴリーというべきものであって、人々がおおよそ許容でき、正当だと考える範囲が「価格の正常値」であり、価格はこのような安定した集合意識⁽³⁸⁾の存在、経験の継続や慣習と結びついていたのだという（少なくとも、バブル以前は）。この発言自体は大変興味深い内容であり、説得力のある議論（飯田経夫なども同じようなことをいっている）でもある。市場がこのような多面的・多義的な存在であるならば、主観や感情を排除したデジタル的思考、あるいは、分析知＝部分知のみをもってしてはその全体像を読み解くのはもとより困難ということになる。ここで求められるのはまさに「常識」につながる全体知そのものなのである。

おそらく、情報社会についても同じことがいえるのだろう。そこが本来は多面的・多義的な意味をうちに含んだ世界であり、感情や情念や主観性を含んだ世界であるならば、部分知だけでは世界の実態を把握することはできないのである。情報社会が人間の生きる場である限り、情報社会は感情や情念や主観性を含んだ多元的・多様な意味の世界であり続けるはずである。やはり、そこは、共感や常識といった人間的な意味のありかたが前提とされる世界なのである。

コンピュータを駆使した情報処理だけでは初めからこの世界の多様な意味は読み解くことができないというのは「常識的」に考えれば自明の真理である。コンピュータ的データ

そのものの中には最初から全体知も喜怒哀楽もまったく存在しないのである。そのことを忘れた瞬間から情報社会の「おぞましき」が始まるのであろう。

注

- (1) Merleau-Ponty, M., 1942, *La structure du comportement*, Presses Universitaires de France, Paris. 滝浦静雄、木田元訳、1964、『行動の構造』、みすず
- (2) 「情報行動」とはある意味ではいい加減なことだが、情報社会論の領域ではそれなりに使用されるようになってきている。狭い意味ではコンピュータや情報通信技術の使用を意味し、それより広い意味ではメディアやコンピュータ使用による人間のコミュニケーションや認知の変容、「進化」を指す。さらには、人間の脳や感覚器官による情報処理を意味する場合がある。ここでは、人間の脳や感覚器官による情報処理のことを指すととりあえず考えておきたい。
- (3) フッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』でこの「自然主義」至上主義に対して次のように批判している。「たんなる物体科学は人間について重要なことは教えてくれない。それは一切の主観的なものを捨象する。また、精神諸科学にかんしても、厳密な学問性がもとめられ、研究者はあらゆる評価的な態度を、すなわち主題となった人間性や、その文化形象の理性と非理性への問いを用心深く排除することが要求されるといわれる。学問的で客観的な真理とは、もっぱら世界が、すなわち物理的ならびに客観的世界が、事実上なんであるかを確定することだ、というわけである。」～Husserl, Edmund, 1936, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. フッサール、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（細谷恒夫・木田元訳）、中央公論社（1974）、邦訳17頁。
- (4) この点についてはたとえば、山崎庸佑、1974、『現象学の展開』、新曜社、40頁参照。
- (5) たとえば以下の文献。拙稿、1998、「モノの情報・コトの情報」、『群馬大学社会情報学部研究論集』、第5巻39-57頁。拙著、1997、『情報社会の病理学』、砂書房など。
- (6) 波多野和夫、1992、「クリューバー・ビュシー症候群」、『イマージ』Vol.3-4（特集：神経科学の現在）94-103頁。上野照子、小野武年（富山医科薬科大、第二生理学）、1997、「感情（情動）記憶のメカニズム」、『神経研究の進歩』、41巻4号、574-589頁。Klüver, H. and Bucy, P.C., 1937, *Psychic blindness and other symptoms following bilateral temporal lobectomy in rhesus monkeys. Am J Physiol* 119: 352-353. Klüver, H. and Bucy, P.C., 1939, *Preliminary analysis of functions of temporal lobes in monkeys. Arch Neurol Psychiatry* 42: 979-1000.
- (7) Jackson, H., 1866, *Notes on the physiology and pathology of language*, in *Selected Writings of John Hughlings Jackson*, Hodder and Stoughton, London, 121-128. (1932) Jackson, H., 1874, *On the nature of duality of the brain*, *ibid.*, 129-145. Jacksonの議論については、山鳥の文献を参考にした。山鳥重、1985、『神経心理学入門』、医学書院。
- (8) ルソー曰く、「人間に言葉を発するようにさせた最初の動機は情念であったから、その最初の表現は比喩 trope であった。」（ルソー『言語起源論』第3章）。引用は、中村雄二郎、1997、『感性の覚醒』、岩波書店による。
- (9) 中村雄二郎、前掲文献、231-232頁。
- (10) 山鳥重、1997、「感情の神経心理学」、『神経進歩』、41巻4号、605-613頁。
- (11) 「全体知」、そしてその対概念としての「部分知」（コンピュータ的な要素還元論的な方式の知）という用語はフロムや木村敏などの議論を参考にして筆者が作り出した造語である。「部分知」、「全体知」ということば自体にはそれほど深い意味があるわけでもない。ただ、人間の知恵の多様性について理解が深まればそれで良いのである。この点については、拙著、1997、『情報社会の病理学』、砂書房、を参照されたい。

- (12) Merleau-Ponty, M., 1942, *La structure du comportement*, Presses Universitaires de France, Paris. メルロ＝ポンティ (滝浦・木田訳)、1964、『行動の構造』、みすず、邦訳166頁。
- (13) 『行動の構造』、邦訳36頁。
- (14) 渡辺叡、坂田春夫、長谷川敬、吉田辰夫、畑田豊彦、1975、『視覚の科学』、写真工業出版、32-37頁。
- (15) 渡辺叡、坂田春他、前掲文献、138頁。
- (16) 山鳥重、1985、『脳から見た心』、日本放送出版協会、95-103頁。
- (17) 山鳥重、1996、「意味記憶の障害」、『神経心理学と精神医学』(日本生物学的精神医学会編)、学会出版センター、113-126頁。
- (18) ゴールドシュタインのいう抽象的態度、範疇的態度の問題については以下参照のこと。浜中淑彦、1980、「生命科学与現象学」、木田元他編、『講座・現象学4 現象学と人間諸科学』、弘文堂、第5章。Gurwitsch, A.: Gelb-Goldstein's concept of "concrete" and "categorical" attitude and the phenomenology of ideation, *Philosophy and Phenomenological research* 10; 172, 1949. Gurwitsch, A.: Goldstein's conception of biological science, in *Studies in phenomenology and psychology*. (原典は *Rev. philos. de la France et de l'Etranger*, 1940)
- (19) 『行動の構造』、邦訳70頁。
- (20) 筆者の「全体知」、「部分知」という仮説の成立には、フロムの議論やゲシュタルト心理学の所見(メルロ＝ポンティの議論も当然含む)などと並んで木村の議論が大きなヒントとなっている。
- (21) 木村敏の文献については、主として以下の文献を参照した。～木村敏、1994、『心の病理を考える』、岩波新書。木村敏、1995、『生命のかたち／かたちの生命』、青土社。木村敏、1988、『あいだ』、弘文堂。木村敏、1975、『分裂病の現象学』、弘文堂。
- (22) 木村敏、『心の病理を考える』、31頁。
- (23) 木村敏、『心の病理を考える』、20-21頁。
- (24) 中安信夫、1992、「妄想知覚の神経心理」、『イマージュ』、1992、vol.3-4、青土社、216頁。また、状況意味失認については、中安信夫、1990、『初期分裂病』、星和書店も参照した。
- (25) 齊藤治、丹羽真一、平松謙一、亀山知道、福田正人、1985、「精神分裂病の認知障害」、『臨床精神医学』、14 (6)、891-906頁。
- (26) Place, E.J.S. and Gilmore, G.C., 1980, "Perceptual Organization in Schizophrenia", *Journal of Abnormal Psychology*, Vol.89, No.3, 409-418. 御領謙、1985、「認知理論と認知障害」、『臨床精神医学』、14 (6)、883-889頁。
- (27) 松井三枝、倉知正佳、1976、「精神分裂病」、『神経心理学と精神医学』(日本生物学的精神医学会編)、学会出版センター、171-189頁。
- (28) 須賀良一、1985、「慢性分裂病における統合力の検討」、『臨床精神医学』、14 (5)、801-809頁。
- (29) 拙著、1997、『情報社会の病理学』、砂書房、第7章参照。
- (30) 荻阪直行編、1997、『脳と意識』、第1章、29頁以下。
- (31) 荻阪直行編、前掲文献、第1章、29頁以下。
- (32) 須賀哲夫、1980、『知覚と論理』、東京大学出版会。
- (33) Marr, D., 1982, *Vision: A computational investigation into the human representation and processing of visual information*, W.H. Freeman. 乾他訳、1987、『ビジョナー視覚の計算理論と脳内表現一』、産業図書。
- (34) 乾敏郎編、1995、『認知心理学1 知覚と運動』、東大出版会、第5章(行場次朗)、133頁。
- (35) Haward Gardner, 1985, *The mind's new science*, Basic Books, N.Y. 佐伯胖、海保博之監訳、1987、『認知革命』、産業図書、邦訳、292-293頁。
- (36) 佐藤康邦、1994、「直観の構造」、『現代思想 特集：アフォーダンス』、1994年11月号、248-260頁、

引用は256-257頁より。

- 37) Victor von Weizsäcker, 1950, *Der Gestaltkreis; Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen*, 4. Aufl., Georg Thieme Verlag, Stuttgart. ヴァイツゼッカー (木村敏、浜中淑彦訳)、1975、『ゲシュタルトクライス』、みすず、邦訳57頁。
- 38) 佐伯啓思、1995、『現代社会論』、講談社。

A critical essay about the Information-Society (4)

Makoto NAKADA

One of the most crucial problems of our age is that we have almost completely lost the central ideas or conceptions about ourselves. We human beings seem to have no clear images about the total shapes of ourselves at this present time. What we can barely have at this time is nothing but fragmented images and knowledges of ourselves. We can't find any concrete and meaningful answers as to such important questions; what we are?, where we can go?, what we really want?, what we should do? There are no doubts that we have completely lost our way. In a way, the myth or the illusion of the so-called Information-Society, the illusionary myth that by highly developed technology of information and communication the modern men could realize the higher level of self-realization, is closely related with this state of our mind; lack of meanings for being and existence. According to this type of optimistic theory of Information-Society which might be called "Technology oriented theories of Information-Society", the computers or the technologically advanced means of communication and information are supposedly the new sources of growth and development of mankind and his civilization. One of the reasons of prevalence of this type of vulgar discussion throughout the world of today which is practically meaningless appears to be due to some of the characteristics of our age; lack of total images of ourselves or lack of self-identification of most of ourselves. In my opinion, the critical analysis of the techno-oriented theory of Information-Society seems to give us useful suggestions as to the problem at the same time; how we can cope with the present difficulties of the modern men i.e. the meaningless state of our soul and mind.

—
—
—